粟小島考

中西靖忠

百伝之　八十之島廻乎　傍雖来　粟小島者　雖見不足可聞（巻9・1711）

万葉集巻九に「右二首或云柿本朝臣人麻呂」と左註のある一首である。ここに出ている粟小島について考察してみたい。

〝略解〟〝古義〟とも「集中粟島とよめる所に同じ」とし、仙覚の註釈「讃岐国屋島　北去百歩許　有島　名曰阿波島ト云へり　此島ヲヨメル歟」にほぼ従っているかの如くである。仙覚の説は巻四の丹比真人笠麿の歌(509)に註したものだが、屋島沖の粟島の根拠は鎌倉時代には、「いまは伝わらない〝讃岐国風土記〟が残っていて彼の目に触れたのだろうと推測される。古事記の「次生淡嶋　是亦不入子之例」とされる島としている。交通未開、地誌や地図の少い時代であるから、「猶よく尋べし」と断定は避けている。

万葉集中で粟島は大阪湾にあったことがつぎの歌で推定される。

武庫浦乎　榜転小舟　粟島矣　背爾見乍　乏小舟（巻三358・山部赤人）

粟島爾　許枳将渡等　思鞆　赤石門浪　未佐和来（巻七 1207）

武庫川の流れこむ河口は、いま兵庫県の西宮市にあり、武庫の浦を旧武庫郡の六甲山麓とすると尼崎から神戸までの広い浜であるし、また次の歌から明石の対岸であったことも明らかである。さらに笠麿が筑紫に下る時の歌は淡路の屋島かと思わせる。それは

……天佐我留　夷及国辺爾　直向　淡路乎過　粟島乎　背爾見管　朝名寸二　水乍之音喚　暮名寸二　梶之聲為乍　浪上乎　五十行左具久美　磐間乎　射往廻　稲日都麻浦箕乎過而　鳥自物　魚津左比去者　家乃島……（巻四 509）と歌われているからである。

明石海峡を西に越えて、家島群島（姫路市の南の島、飾磨郡家島町）をさして航海するとき、背面になる島である。淡路島の北端にはいまも絵島というほんとに小さい島がある。とすれば仙覚をはじめ徳川時代の屋島沖とする註釈は地理に合わない。

浪間従　雲位爾所見　粟島之　不相物故　吾爾所依児等（巻十二 3167）

この歌の上三句は「あはぬ」にかかる掛詞であるから、地理はどこでもよいわけだが雲居に見ゆるとなると広々した海が連想され、大阪から徳島の眉山が望まれただけに、澤瀉久孝氏のように四国の阿波の国(注釈)しても妥当である。

そのほか集中には巻十五に二首出ている。これは天平八年新羅に使する船が、いまの山口県岩国市沖を過ぎる時の歌なので、大阪湾の粟島とは別な島であることは明らかで諸註も一致するが、「今の何島であるかは不明である。」(窪田空穂の〝評釈〟)

周防国玖珂郡麻里布浦行之時作歌

伊都之可母　見乍等於毛比師　安波之麻乎　與曽爾也故非無　由久與思乎奈美（3631）

安波思麻能　安波自等於毛布　伊毛爾安礼也　夜須伊毛禰受弖　安我故非和多流（3633）

以上で万葉集中の粟島は全部である。そこで粟島について、現代の説をあげることにする。

澤瀉久孝氏の〝注釈〟は、賀茂真渕が〝考〟で推定し、武田祐吉氏が〝全註釈〟で説いた四国説を支持し「阿波と考へてよいやう思はれる。それを阿波国に限定せずに少し広く、四国の阿波方面とするのを穏当な解と思ふ」とされている。明石海峡の歌（1207）をも、「地名辞書に淡路の岩屋浦の『絵島、大和島などに当ると思はる』とあり、この歌ではさういふ場所のやうにも思はれるが、阿波の国をさしたとみるべきであろう」としている。

しかし、明石海峡を出て家島をさしてゆく時は、実際に見えるのはほとんど淡路の島山のみである。山田孝雄氏の講義は「淡路の北端岩屋岬の一部かといひたれど證もなきことなり。……淡路島の附近の地なることは疑ふべきことにはあらねど、今その名ある小島を見ず。古今にその名のかはれる為か。後賢の研究を待つ」とあり、土屋文明氏は〝私注〟で「淡路に並んだ島であることが知られる。淡路の一属島であらうか。けれども其に当るものは現在の地図上では適当なものがない。或は淡路島の一部分でありながら、海上より島の如く眺めらるる地点に附けられた稱呼であるかも知れぬ。四国の阿波であろうといふ説もある」とされている。

豊田八十代氏の〝万葉地理考〟は、地名辞典には『この島ならむといへり』として屋島沖、『讃岐国木田郡庵治村の西北二海里に大島あり』としている。〝万葉の旅〟で知られる犬養孝氏が「屋島北方の島、淡路島の屋島、淡路島、四国等の諸説があるが、所在未詳といふべきである」（万葉の風土）というのが大方の結論である。

さて、「見れどあかぬ麻里布の浦」（3630）附近にある粟島も美しい島であろうが、「見れどあかぬかも」と断定して歌われている粟小島は、いままでの注釈者は「集中粟島とよめる所に同じ」と軽く片付けている。斎藤茂吉氏の〝柿本人麿評釈篇〟にも、諸抄の説のほか伯耆風土記の相見郡粟島、真渕の指摘した阿波国板野郡小島や紀伊国粟島に触れるが、「吉田氏の地名辞書には讃岐国木田郡庵治村の海上にある大島だろうと云っている」といった調子で全く未決定である。私はこの小島は西讃岐の詫間湾に浮ぶ粟島ではないかの疑問を提出したいのである。

香川県の粟島はいま三豊郡詫間町に属し、瀬戸内海の絶景といわれる国立公園荘内半島の東北に位置する。三つの丘が砂浜で結ばれた海岸美を誇る小島である。安政５年に出来た西讃府志によると「粟島ト名クルハ粟島明神鎮リ座ニヨリテナリト云リ、東西一里一丁、南北二十町、廻リ百五十町、丸亀ヲ去ルコト海路四里」とある。

「百伝う八十の島廻」とは数多い島々という意味であるから、瀬戸内海でも塩飽七島などいわれる多島海の一部であること、そして女性的な美しい小島で、歌のとおり「見れどあかぬ美しさ」である。また左註にあるように、人麿の作とするならば、人麿の足跡はこの近くにある。粟島から直線距離で２キロのところが、丸亀市中津であって、人麿はここから船出し風を沙彌島に避けて「讃岐狭崖島視石中死人作歌一首並短歌」（巻2・220―223）を残した。「玉藻よし讃岐の国は」ではじまり「中乃水門従　船浮而」の中乃水門が指顧の間にあることだ。以上の三点が主たる根拠である。

澤瀉氏の〝注釈〟には山口県に属する3631の歌について「山中鉄三氏の粟島は『可太の大島』（3634）)のことではないか、現在大島郡の東和町正厳寺で毎年四月、『粟島さん』と云ってお祭が行はれている」ことを紹介して「大島と粟島との密接な関係を示すもので

はないかと云はれてゐる」と結んでおられる。周防大島の別名をもつ屋代島のことで、古事記に「次生大島」と出ている島という。面積は140平方キロもあって瀬戸内海三番目の大きさである。この島をも〝小島〟と呼ぶには疑問は残る。歌は、

筑紫道能　可太能於保之麻　思末志久母　見彌婆古非思吉　伊毛乎於伎弓伎奴

である。

可太の大島で思い出されるのは、和歌山市の同音の加太神社で、俗称を淡島(粟島とも)明神という。蕪村の句に「粟しまへはだし参りや春の雨」(夜半叟句集)とあり、徳川時代から婦人の信仰の厚いお宮である。祭神は少彦名命と大己貴命らで、伯耆風土記の相見郡粟島から招じたの説もあるが、日本随筆大成（第三期）の中にある〝百草露〟には縁起を、神功皇后が三韓征伐の帰途、浪風に悩まされて祈禱された結果、「浪に浮きて行ままに御船　此淡島に着給ひ」と誌している。周防可太の大島と紀州の加太の粟島、そして讃岐の粟小島、内海の航海とか神々の足跡等つながりがあるように思われるが、にわかには即断しかねる。〝西讃府志〟による粟神明神は「祭神少彦名命又或ハ四所明神ト称ス　其故詳ナラズ　祭祀九月九日」とある。なお折口信夫氏の〝万葉辞典〟には、粟島を和歌山、加太沖の海中にある友ヶ島としている。

可太と加太の地名の共通することや少彦名命の足跡がわかればもっとはっきりすることだろうが、粟小島とことわってある以上、大島と名のつく島でないことだけは確かだといえよう。

高松短期大学研究紀要

第　4　号

昭和49年3月1日印刷
昭和49年3月10日発行

編集発行　高松短期大学
高松市春日町　960

印　刷　新日本印刷株式会社
高松市木太町2158